【コメント】

伊藤 奈保子 Itō Naoko
Hiroshima University

メラノヴィッチ氏は、“Globalization”（グローバリゼイション）というキーワードをもとに、現在、政治、経済、技術等とともに、文化の改革がおこなわれていることを示唆。ITの発展のもと、宗教以外、多くの点において、“Global” と “Local” の統合がすすみ、造語である “Glocalization” として統一された価値観が世界を覆おうとしていることを提示。

その上で、各地域における「伝統文化」の世界の統一はありえるのか、また、「伝統工芸の果たす役割とは何か」という問いを投げかけた。

また、日本の創り出す独自な文化、例えば陶磁器、和紙、漆塗り、ガラス、人形、版画、造園、中でも龍村の織物を大きくとりあげ、それらが世界に浸透、評価される理由を、「統一化されない独自の観点にたつもの」として紹介。それらの伝統作品、工芸を創りだす「作り手」についても、氏は発表のなか、「美術」と「工芸」、「作家」と「職人」の区別をつける必要はないのではないかと述べた。そして最終的に、他の分野においてグローバリゼイションが進んでも、その地域に培われた文化は、その地域の人の「根幹」をなすものであって、「伝統文化の統一」はありえない、また伝統工芸はその地域独自の精神の現われであり、回帰性を伴うもので自国の文化を再認識する役割をも果たしていると結んだ。

氏の発表について、私もほぼ同様の意見をもった。世界は急速にコミュニケーションの躍進を遂げ、一つのグローバル村を作り上げようとしている。しかし、そうなればなるほど、独自のもつ「伝統文化」に回帰し、そこに安らぎを求めるのではないだろうか。

日本の文化の評価について、シンポジウム開催当時私はインドネシアに在住していたが、日本のマンガ、アニメ、J-POPなど、ポップカルチャーが特に若者のなかで人気が高く、広く受容され、流行していることを実感。その一方で、「日本」を意識、象徴するものについては、「富士山」「芸者」「侍」などの、従来日本にもちあわせるイメージがそのまま浸透していることも確かである。文化は常に、受容、変容を遂げていく。今後、グローバリゼイションが進むに従い、「伝統文化」への回帰性はより強まる傾向を示し、それとともに、以前にはみられなかった新しい評価も同時に生まれてくるのではないだろうか。

また、従来の工芸品にみられる、新しい試みとしてのデザインの開発についても眼を見張るものがある。それらは、たとえその形状が変わろうとも、それ自体のもつ機能性や審美性を失わない。そして地域ごとで培われた意識というものが、おのずとこめられていると思わせるのである。その例として、私は、氏の発表内、日本の仏具のおりん（鈴）を例に挙げた。従来おりんは、鈴と布団と台、鈴を鳴らす木製の鈴棒から成るものだが、近年、布団と台を省いた「たまご形のおりん」が現われた。形は意表をつくが、地金はしっかり

しており、従来の品々に劣らぬ音色をもつ。そして付属のりん棒は、利便性を考慮し、横に倒れず、常に起き上がるように仕上がっている。この棒の仕組みこそが、配慮を廻らす「日本人の感覚」の現われであり、それが形状の上にではなく品物に図らずも継承され、伝統という形へと移行してきたのではないだろうか。そしてそうしたものに、人々は価値観を見出し、共感をおぼえてきたのではないだろうか。こうした「個の価値観」の集まりが、文化を形成しているとみることができよう。氏の指摘するグローバリゼイションが、文化において統一はないと考えるのも、こうした点からもうかがわれる。

氏の「作家、職人といった芸術家たちが、伝統的な技能と美の哲学とを組み合わせ、そしてそれが何世紀もの間、発展されてきた」ということが、グローバリゼイションのもと、今後、どう展開していくのか見守っていきたい。